特集「詩型の交流」

俳句

46　阿部圭吾◇
47　尾崎秋南◇おだいじに
48　谷村行海◇素肌
50　辻原僚◇歳末の猫

川柳

51　阿部圭吾◇鳥になる
52　大村咲希◇移動する食べ物屋
53　武田穂佳◇トゥインクル
54　暮田真名◇旅のしおり詩

詩

56　甲斐いづみ◇偏食
58　染川噤実◇旋律めく賢しらな

随想

60　手塚玄惟◇形而下の音を訪ねて
64　関寧花◇砂丘律に寄せて

小説

67　堂那灼風◇タウルスの右耳

◇　阿部圭吾

春立つやバレーボールの無回転

夏の月ジャングルジムを登りきる

秋晴れや銀河鉄道まで遠い

深呼吸して肺の奥から真冬

オリオンを見つめて澄んでゆくひとみ

おだいじに　◇　尾崎秋南

描いてくれと言わんばかりの赤林檎

日も影も私も短くなって、冬

寒いねと言い合ってても寒いだけ

霜柱　踏まれたことは忘れない

プリントに「雪原定理」と書いて〇

オリオンのベルトを誰も見ていない

寝息まで白いのだろう　おだいじに

素肌　◇　谷村行海

ほうれん草のたてかけられし事故現場

春日傘あしたも男として生きる

マネキンの乳房の垂直衣更

避妊具の打ち上げられて夏の空

親友と呼べない友よ秋の蝉

母親の嬌声良夜のナポリタン

かなかなや部屋から何かの金属片

片方の眼飛び出し鳥渡る

吉祥寺の家なき人も冬の服

わたしにはなき入れ墨や冬至風呂

歳末の猫　◇　辻原僚

雪山や骨を折るのはもうやめだ

買い出しへ行くためだけの古コート

夏だった虫が窓辺に冷えている

錠剤を飲んだ人から冬ごもり

去年今年タバスコ半分ほど余る

鍋という鍋は作ってしまったな

咳くたびに猫のうろつく星であれ

鳥になる ◇ 阿部圭吾

花として花を絶やさぬために散る

橋の下まで月光が追ってくる

翼から空の匂いがする天使

また朝がくるから鳥になりました

風上を目指せばたどり着く明日

移動する食べ物屋　◇　大村咲希

飼い主が石焼きいもを追いかけて

ケバブ買うたびの異文化交流に

あれもクレープこれもクレープ

トゥインクル　◇　武田穂佳

詳しくは知らないけどWANIMAが嫌い

壊れてはないけど点きにくいテレビ

どこからがカーブだったかわからない

唇のかたちにちぢむ物語

ドキンちゃんねがえば叶うこころから

旅のしおり　◇　暮田真名

サーチライトは物産展だ

歯みがき粉みたことないよ今世では

秘仏とか綿毛まみれのラムネとか

子ぐま座の焼けた毛並みの立ち見席

竜巻の取扱いに準じます

正門の夜裏門のプロトコル

雰囲気にのまれて砂丘するおかゆ

白菜と鶏の水炊き　シンギュラリティ

箱庭を重油浸しにするチャンス

ダイヤモンドダストにえさをやらなくちゃ

偏食　◇　甲斐いづみ

にんじんは嫌い炭酸水も嫌い
好きなものしか食べないし
嫌いなものは見たくもない

好きなものしか読まないし
好きなものしか着たくない

好きなものだけでできている

やわらかくて

しろい

わたしのからだ

旋律めく賢しらな　◇　染川噤実

この部屋にいる私を、恋人はすっかり見つけられないので、私はその窓の内側から何通も何通もことばを流し、恋人が拾い上げる数匹のそれ以外は、排水口に詰まって死に、腐敗して意味になってしまった。腐乱したかわいそうなことばは、もともとはメトニミーで倒置法で係り結びで、可愛らしい詩歌だったのに。仕方なく私がその腐乱を迎えに行くと、恋人がそこに立っていて、感情の外に出てしまって寒い私は、そのままその腕の中で、私を構成するものを全て発酵させてゆく。手のひらに曇った窓の小部屋が残る。意味でしかない。結局のところ、柔らかいものを千切り潰すとき、

わざと引き起こす心地よい怒りのような、この次第に踏みにじられていく文法を、恋人どころかあなたに理解されることも期待していない。ことばはことばであるだけで、必然的にそこにあるような顔をして、旋律めく賢しらな獣だ。一方向にしか進めない可哀想な獣。繁茂しては排水口に詰まる獣。毛が生えているばっかりに誤解される小動物。めのいろがあかいのだけを戯れに拾い集めては、殺しもせずに飼い慣らす恋人が、大好きで大好きでたまらないから、合法的に出血するにくたいが、近頃あかいめをしたことばばっかり産んでしまう。